最終講義　　『人間 と 学問』　　配布資料

実践心理学科　教授　吉田章宏

2010　02　18　11：00－12：00.　Room 10-202

1995年に、「最終講義」を東京大學で、その題は、「青年の日、夢みし学、未だ成らず」だった。

叔徳の皆さんとの出会いを私は幸せと思う。今ここでの一時間を充実させることが私の責任である。演題を『人間と学問』とした。表題を覚えていただければ、内容もまた思い出してくださるか。

「人間」について　「人」は、人の姿を象っています。また、人と人が支えあっている姿だ、と象徴的に解釈することも出来ます。「間」は、「門」の間に「日」が見える形象です。「門」は、内の世界と外の世界を区切っている境に属していて、二つの世界をつなぐ道です。開いたり閉じたりすることで、二つの世界は、繋がったり断ち切られたりします。「間」は、「門」を通して、「日」（太陽）が出てきて、日の光が射してきている光景とも解釈することができるでしょう。日光の陽射しが、目を射るとすれば、その時、「間」に気づかないことは出来ないしょう。

「間」を表すのに、これ以上適切な比喩があるか？　「人間」については、和辻哲郎の考察を借ります。

「学問」について　「学」は、「子どもが真似る姿を形象化している」。「學」は、「教」と繋がる。また、「樂」とも。「心理学」か「心理楽」か。「問」は、外の世界から「門」に向けて、つまり、内の世界に向けて、「口を」当てて問う姿でもあろうか。あるいは、内の世界から、門を通して、外の世界に問うている「口」の姿を形象化している。そして、「学問」とは、そのようにして、一つの世界から他の世界へと「問う」ことを、他者が、恐らくその学問の先輩あるいは　先生がしているのを、「学ぶ」こと、そして、また、そのように「学ぶ」ことをを「問う」ことを、意味します。　「学問」とは、「問うを学び、学ぶを問う」経験のたゆまない積み重ねの営みなのです。

"We speak of a human world not because it was made by human beings, or because human bodies and human voices can be seen and heard there. We call the world human because it is a place of dialogue." Hannah Arendt

『人間世界』が人間世界であるのは、人と人との間に対話があるからだ」というわけです。

「人間と学問」とは、「人と人とが対話をして、お互いの問いを学び、お互いの学びを問う、ことを通して、人間社会と一人ひとりの人間を、『人間世界』にして行くこと」の話。「人と人が、その間で、対話をして、問いを学び、学ぶを問う」つまり「人間と学問する」ということ。

心理学が人間の（人間が対象でも主体でもある）、人間による、人間のための「学問」になって欲しい。

Psychology : a "Gakumon" of the human , by the human, for the human.（人間中心主義の謗りは、当面、甘受する）

Video Film: Powers of Ten

こう考えてくると、何を学んでも、心理学の「問い」が生まれ、心理学の「学び」が生まれる、したがって、「心理学」の「学問」が生まれることになります。さて、そこで、　To see a World in a Grain of Sand / And a Heaven in a Wild Flower / Hold Infinity in the palm of your hand /And Eternity in an hour　　William Blake

仏教の華厳経での、「一即多、多即一」、「微塵のなかに一切を見る」、「時間的にいえば一念のなかに永遠を見、空間的には一点の中に全世界を包摂する」という思想に繋がっています。

心理学では、心を柔軟にして、物事を多面的に見ること、そして、その多様な可能性を見ること、さらに、物事の分節化の無限の可能性を見ることが、大切になってきます。

Necker Cube: Don Ihde; *Experimental Phenomenology*　Putnam

始原の「問い」を「学ぶ」ことが、つまり、出来合いでは無い、最初の「問い」を「学ぶ」ことが、そして、自らも、そのような「問い」を発することができるようになることが、大事でなのす。

フッサール、E．は、そのことを、「幾何学の起源」Husserl, E. The Origin of Geometry 論文で。

授業の研究について　私は、たくさんの学校と大学を経験することになりました。たくさんの大学で、教育を受ける立場と教育を授ける立場と共に経験した。22歳の僕は、教育心理学の、三木安正先生の講義に惹かれて、それまで聞いたこともない教育心理学なるものを、一生の仕事に選んだ。教育心理の学問を通して、世に貢献したいと「ほざいて」いた。

昭和35(1960)年の東京大學卒業式では、全卒業生3000余名を代表して、安田講堂の壇上で、茅誠司総長と対面して、答辞を読み上げる機会に恵まれた。大学院に進学し、私の心理学研究は、順調に進むかに見えた。だが、心理学への私の過大な期待のために、私は挫折した。

そのころ私が知った最新の心理学の認識論的基礎が危ういことに気づいてしまった、のでした。

1964年、アメリカ合衆国イリノイ州立イリノイ大学に、フルブライト留学生として留学する。日本の世界から、アメリカの世界へ、ヨーロッパ諸学の世界へと私は導き入れられた。Ph.D. 博士号を取得。

ジャネ（じゃーね）、ピエールは、「心理学者は何でも屋でなければならない」という。

私は「博士（はかせ）」になった。その後、今年で、約43年になる。では、どうなったか。

43年経って、いまは、もっと偉くなったでしょうか。はい、「はかせ」よりも少し偉くなった。「なーんちゃって」。

「学者悲劇」柴田　翔(1985)『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波セミナーブックス　100ページ

学者の「問い」；「問いを学ぶ、学ぶを問う」。「総てを知りたい、だが、知ることは出来ないじゃないか。」仮に「総てを知ったとして、それでいったい、どんな意味があるって云うんだ。」

心理学の研究　時は前後するが、認知心理学（ピアジェ、ブルーナー、オースベル）、サイバネティックス（アシュビー）、システム論（ベルタランフィーなど）と唯物論心理学（ルビンシュテイン）を統合して、現実の教室学習を理論化するなどという夢を抱いていた。現実の実践を知りたいと考え、教授学研究の会の活動に跳び込んだ。教育実践者・斎藤喜博先生に10年間ついて歩いた。研究者としての貢献の可能性がどこにあるか、思い悩んだ。Lester Embreeは、Scholarship and Investigation（学問研究と探究）を区別している。偶然、『生きがいについて』に出会い、それを通して、神谷美恵子先生のお仕事と出会った（1974年だったかと思われる）。そして、「現象学的精神病理学」、ついで、「現象学」、さらに、「現象学的心理学」へと進んできた。1980年、フルブライト上級研究員として、現象学的心理学のDuquesne Univ.に赴き、一年を。一冊の本がその「門」だった。Amedeo Giorgi; Psychology as a Human Science. Harper and Row　現象学という学問の学びを。最近は、自らの「学問」（問うを学び、学ぶを問う）を省みて、その意味の探究を始めている。

いま、学ぶを深めたい諸著作：Roman Ingarden Der Streit um die Existenz der Welt、Max Neimeyer

空海「秘密曼荼羅十住心論」空海全集　と　井筒俊彦『意識と本質』岩波文庫

「人間」としての僕の「学問」は、これからだ、と考えている。

心理学の方法論　プリントのリスト（3−4ページ）をご覧いただきたい。盛岡で、見知らぬ子どもと笑みを交わすことの喜びを学んだ。

授業の心理学　授業（ジュギョウ、ジュゴウ）とは、「学問」を集中して行う時空の場である。業(ギョウ)を授け受け、業(ゴウ)を授け受ける場である。　＜『受業授業』　求道愚童＞を執筆公刊予定

蘆田恵之助『松阪の一夜』は、恵之助の授業と、賀茂真淵と本居宣長の授業、業と業の授受を描く。

私の言葉　「止揚しよう　甘え　傲慢　無知　怠惰」吉田章宏　作

「井の中の蛙　大海を知らず　されど　井の中を　知る

大海の巨鯨　大海を知る　されど　井の中を　知らず」吉田章宏　作

「共に育ちましょう」（蘆田恵之助の教育遺碑の碑文：北海道小樽市緑小学校所在）

「謙虚とはよく見ることです」（斎藤喜博が武田常夫に贈った言葉）。

「謙虚とはよく聴くことです」、「謙虚とはよく読むことです」、「よく味わう」、「よく触れる」、「よく噛み味わう」、「よく嗅ぐ」・・・（？）

おわりに　皆さんに贈る言葉。

まず、みんなが「はかせ」になってください。

それから、「はかせ」にさらに二つ点を打ってください。

これは、「はかせ」にならなくても、

神谷美恵子著「生きがいについて」（みすず書房）

をよく読めば、なれるかもしれません。

学問をやるなら、本物の「学問」をつくり、「人間」として、

世のため人のために、生きてください。

これが、今日の最終講義のメッセージ、となる、かな？

静かに聴いてくださって、謙虚な方々ですね。ありがとう。

言及した文献から

蘆田恵之助(1934・昭和9年)『松阪の一夜』、同志同行社

井筒俊彦　『本質と意識』岩波文庫

エンブリー、L.『使える現象学』ちくま学芸文庫

神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房

小林秀雄　『本居宣長』上下　新潮文庫

柴田　翔(1985)『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波書店

中勘助　『銀の匙』岩波文庫

山之口貘　『山之口貘　詩文集』講談社文芸文庫

ユクスキュール　『生物から見た世界』岩波文庫

和辻哲郎(1934)『人間の学としての倫理学』岩波書店

女子卒業生らとビールで喜び合う茅東大学長（中央）

あらゆる経験で人間形成はかれ

東大卒業式で茅学長

東京大学の八十六回卒業式は二十八日午前十時から東京本郷の安田講堂で開かれた。〝大学九年生〟として話題となった法学部桑原宗一郎君(三四)ら十学部二千百八十七人（うち女子七十九人、留学生十九人）が卒業証書をうけた。茅学長は「諸君の就職状況がよかったのはすぐに社会の役に立つからではない。将来責任ある仕事ができるというポテンシャリティー（潜在力）をもっているからだと思う。学内、学外のあらゆる経験によって人間形成を図ることが必要だ。また世界に平和共存のときがきても兵器を使わない資本の戦いが展開されるに違いない。諸君は底の深い産業の建設に努力してほしい」と訓示、教育学部吉田章宏君(三四)が卒業生を代表して「長い間お世話になりました」と答辞した。

式後運動場で学長、教授らを囲んでビールで乾杯、うららかな春の日ざしをうけながら学生最後のよき日を楽しんだ。

吉田章宏　著作物　から

古田章宏(1978)『授業の研究と心理学』国土新書
古田章宏(1987)『学ぶ　と　教える：授業の現象学への道』海鳴社
古田章宏(1996)『子どもと出会う』岩波書店
古田章宏(1995)『教育の心理：一と多の交響』放送大学教育振興会
古田章宏(1999)『ゆりかごに学ぶ：教育の方法』一莖書房

翻訳書　から
オースベル、D.P. &　ロビンソン、F.G. (1984)『教室学習の心理学』松田弥生と共訳、黎明書房
ルビンシュテイン（1981-1986)『一般心理学の基礎』全４巻、
　　秋元春朝・秋山道彦・足立二朗・天野清・佐藤芳男・松野豊・古田章宏共訳、明治図書
キーン、E.（1989）『現象学的心理学』宮崎清孝共訳、東京大學出版会
Yasunaga, Hiroshi (2001) *O.S. Wauchope's Possible Contribution to the Next Generation: Pattern, Pattern Reversal and Phantom Space Theory.* Trans. by Akihiro Yoshida and Steen Halling. Now available in Hiroshi Yasunaga's Homepage on Web-site.(安永浩ホームページで読めます)

編著書　から
古田章宏.・田中みどり共編(2005)　『コミュニケーションの心理学：心の探究の旅』川島書店
　共著者：古田章宏・金沢創・田中みどり・宇佐川浩・大橋靖史・岩井阿礼・
　　上瀬由美子・森津太子・卜雁・小川恵・
古田章宏編(2010)　『心に沁みる心理学』川島書店
　共著者；古田章宏・米山実穂・愛甲修子・矢野久美子・丹野志保・岡愛子・E．ジェンドリン他

吉田章宏　発表論文(2001－)

吉田章宏（2002）「心理学研究方法論をめぐる省察－心理学の人称性：我、汝、誰彼の心理学－」
　　『淑徳大学大学院研研究紀要』第９号，43-56
吉田章宏（2003）「心理学研究方法論をめぐる省察：三心理学の不連続化と連続化の道」
　　『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第10号，1-17
吉田章宏（2003）「心理学研究方法論をめぐる省察：心理学の多種多様性について」
　　『淑徳大学社会学部研究紀要』第37号、149-165
吉田章宏　(2003)「波多野完治と発達研究」、『児童心理学の進歩2002年版』金子書房、339-347
吉田章宏　(2003)「『学びのふるさと』の生成：授業と表現活動の構造と意味」、
　　『いま、学校から　2003』、秋田大学教育文化学部付属小学校　編著、140-175
吉田章宏（2004）「発問の芸術にみる開放性：ある達人教師による実践の現象学的解明」
　　『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第11号，1-34
吉田章宏　(2004)「心理学研究方法論をめぐる省察：多種多様な心理学の統合の可能性」
　　『淑徳大学社会学部研究紀要』第38号、219－240
吉田章宏　(2004)「匿名性を『選ぶ』の構造：心理臨床実践報告におけるその意味」
　　『淑徳心理臨床研究』創刊号11-24　淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
吉田章宏(2005)「『説明』を誘う発問と『理解』を誘う発問－ある達人教師の授業実践における発問芸術の現象学的解明－」
　　『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第12号，39-82
吉田章宏(2005)「心理学研究方法論をめぐる省察：多種多様な心理学の統合は何故必要か」
　　『淑徳大学社会学部研究紀要』第39号、75－95
吉田章宏　(2005)「匿名化から虚構化へ：実践報告の存在理由に即して」
　　『淑徳心理臨床研究』第２巻，1-12　淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター

吉田章宏 (2006)「心理学研究方法論をめぐる省察：三心理学の原定式化の再検討。統合化への『理論的構造』」
『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』第 40 号、39－66
吉田章宏 (2006)「心理臨床実践報告における『匿名化』の限界と『虚構化』の必要性発生の一素描」
『淑徳心理臨床研究』第 3 巻 1-18 淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
吉田章宏 (2007)「統合的な臨床実践学をめざして：臨床実践体験と臨床実践理論について」
『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』第 14 号、1 - 43
吉田章宏 (2007)「心理学研究方法論をめぐる省察：特定諸方法への偏見を克服し、統合化へ向う道」
『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』第 41 号、65－87
吉田章宏 (2007)「実践報告に虚構化を活かす可能性について：クロッキー風に」
『淑徳心理臨床研究』第 4 巻，5-20 淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
吉田章宏 (2008)「多様化を通じての統合化の原理－<RIP friendly SIR STOP etc MOM>原理の提唱：人間の生きられる世界の多元的多様化と統合化の原理－」『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第 15 号，21-64
吉田章宏 (2008)「心理学研究方法論をめぐる省察：心理学研究における研究主体と研究対象」
『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』第 42 号、35－57
吉田章宏 (2008)「『筆者は・・・』と書くか、『私は・・・』と書くか」
『淑徳心理臨床研究』第 5 巻，15－17、淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
吉田章宏 (2008)「質的心理学者への祈り、そして、願い：<学び>の意味と構造を考えつつ、心理学研究者としての彷徨の跡を省みて」、日本質的心理学会第 5 回大会、大会記念企画講演、
於筑波大学 2008 年 11 月 30 日(日)、13：40－15：00、発表論文集 25－27
吉田章宏 (2009)「子どもの学び・教師の学び：本質を考える」教育実践研究、
『教育実践臨床研究　授業研究と教師の成長を結ぶ』藤沢市教育文化センター、7－22
吉田章宏 (2009)「学力をめぐる多様化と統合化の旅：学力の Powers of Ten」
『淑徳大学大学院社会学研究科研究紀要』第 16 号，1-28
吉田章宏(2009)「<教育の極意>『共に育ちましょう』の教育心理学的考察」
『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』第 43 号、71-95
吉田章宏 (2009)「多種多様な心理学の多様性と共に生き対処する在り方について：
諸々の心理学の<混沌>の世界に生きる研究者/実践者、教育者/学習者にとっての問題」
『淑徳心理臨床研究』第 6 巻，5－25、淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
吉田章宏 (2010)「直線、円、螺旋」
『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』第 17 号、
吉田章宏 (2010)「教育心理学の現実性、可能性と必然性」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』第 44 号、
吉田章宏 (2010)「多種多様な心理学と共に生きる」
『淑徳心理臨床研究』第 7 巻，淑徳大学大学院総合福祉研究科附属心理臨床センター
YOSHIDA, Akihiro (2001) My life in Psychology: Making a place for fiction in a world of science.
In *Journal of Phenomenological Psychology*, Vol. 32. No.2. 188-202
YOSHIDA, Akihiro (2006) Values embodied in choosing among possible interpretations: Multiplicity of teachers' values in teaching literary works of art.
Shukutoku Graduate School of Integrated Human and Social Welfare Studies Bulletin, No.13. 1-20
YOSHIDA, Akihiro (2006) On Tamamushi-iro Expression: A Phenomenological Explication of Tamamushi-iro-no (Intendedly Ambiguous) Expressive Acts.
Essais de psychologie phenomenologique-existentielle.Cirp 300-335
YOSHIDA, Akihiro (2010) Living with Multiple Psychologies.
In Michael Barber. Lester Embree, and Thomas J. Nenon ed. *Phenomenology 2008. Volume 5, Selected Essays from North America*, Zeta Books, Bucharest, Forthcoming in 2010
YOSHIDA, Akihiro (2010) A Phenomenological Explication of a Master Teacher's Questioning Practices and its Implications for the Explanation/Understanding issue in Psychology as a Human Science,
Thomas Cloonan ed. "*The redirection of psychology; Essays in honor of Amedeo P. Giorgi*" Forthcoming